

子どもの放課後活動展開に関する調査分析 —多摩ニュータウン諏訪永山地区のケーススタディー—

正会員 ○高木 雄史*
同 松本 真澄**
同 上野 淳***

子ども 多摩ニュータウン 観察調査
放課後活動 屋外空間 地域施設

1. はじめに

近年の子どもの遊び環境は、都市化の影響により地域の自然環境が失われつつあると共に、子どもを狙った犯罪等多発しており、子どもにとって近隣の安全な屋外の遊び場所の確保が重要な課題となっている。こうした背景から、地域における子どものサポートを行う中核施設としての児童館、学童クラブ、「放課後子ども教室」などが注目されている。

一方で、子どもの遊び環境に関する建築計画・地域計画分野の研究は、子どもの空間認知の発達に関するもの、子どもの遊び行為を誘発させるもの、物理的環境が子どもの社会性取得に与える影響に関するものなど、各施設あるいは屋外空間ごとに検討がなされてきた。しかし、屋内外全体を包括し、地域全体として捉えた「街の構造」と「子どもの遊び」に関する研究は十分な蓄積がなされていないと考える。

本研究では、子どもの行為と場所特性に着目し、多摩ニュータウン（以下：多摩N.T.）諏訪・永山地区を対象地としてケーススタディーを行う。多摩N.T.は、歩行者と自動車の分離などの歩車関係の計画を軸に、体系的な公園緑地の整備とこれらをネットワーク状に結ぶオープンスペースの形成によって、居住者の安全や利便性に考慮した街の構造となっている。

2. 研究方法

2.1. 対象敷地概要

対象地である諏訪・永山地区の概要を図. 1に示す。昭和46年に開発された両地区は高齢化が進み、児童数の減少から小学校の統廃合がおきている。14歳以下の幼年人口は、永山は11.9%、諏訪は12.4%で、全国平均(13.5%)と比べて僅かに低い。

諏訪・永山地区には、児童が放課後に利用する地域施設として、学童クラブを併設する児童館が2ヶ所、学童クラブが3ヶ所あり、「放課後子ども教室」が2ヶ所開設されている。また、子どもの主な屋外の遊び場所として、近隣公園が4ヶ所、街区公園が14ヶ所、プレイロット（以下：P.L.）が43ヶ所ある。これらの屋外空間をペDESTリアンデッキ（歩行者専用道路：P.D.）や団地内通路がつないでおり、これらの歩行空間も子どもの主要な遊び場となっていることが、これまでの研究で明らかとなっている。これらの地域の主要な子どもの居場所を図. 2に整理し、その場所を図. 1の地図にプロットした。

2.2. 調査概要

子どもの平日の放課後における活動展開を把握するため、地域施設と屋外空間における観察マッピング調査を実施した。調査方法は、対象地内のあらかじめ決めたルー

地区名	永山地区[6住区]	諏訪地区[5住区]
開発年	1971年(昭和46年)	1971年(昭和46年)
小中学校	小学校…2校 中学校…1校	小学校…2校 中学校…1校
主な地域施設	児童館+学童クラブ…1箇所 学童クラブ…2箇所	児童館+学童クラブ…1箇所 学童クラブ…1箇所
近隣公園	2箇所(計約46,600㎡)	2箇所(計約56,300㎡)
街区公園	7箇所	7箇所
プレイロット	25箇所	18箇所
人口構成		
地区人口	15,739人	10,268人
世帯数	7,426世帯	4,822世帯
幼年人口	1730人	1274人
就学児童	822人	605人

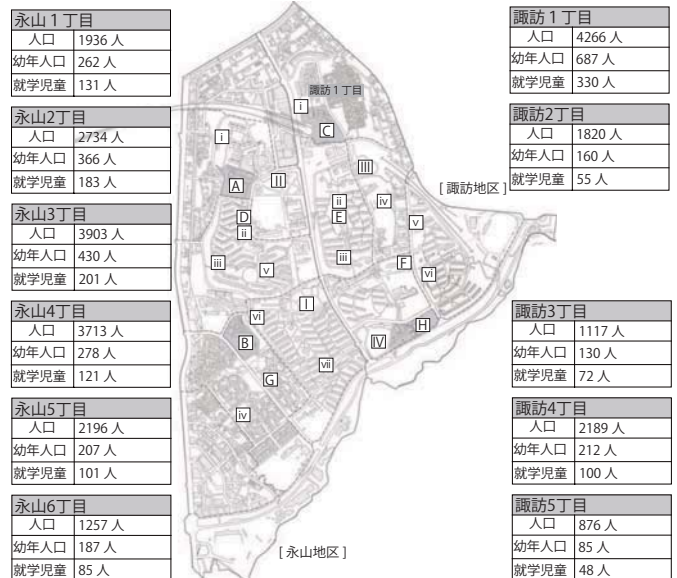


図. 1 対象地区：諏訪・永山地区の概要

分類	屋外空間			地域施設		
	大	小	P.L.	大	小	
用途	近隣公園	街区公園	P.L.	小学校	児童館	学童クラブ
写真						
施設名称	I 永山南公園 II 永山北公園 III 諏訪北公園 IV 諏訪南公園	i 永山第1公園 vii 永山第7公園 i) 諏訪第1公園 vii) 諏訪第7公園	※各所に点在の 為記号省略	A 永山小学校 B 北諏訪小学校 C 瓜生小学校 H 諏訪小学校*	D 永山児童館 E 諏訪児童館	F 諏訪南 学童クラブ G 永山第二 学童クラブ

※放課後子ども教室を開校している小学校

図. 2 子どもの主要な居場所の類型

トを調査員が巡回し、子どもの性別、行為、集団の人数などを記録した。調査は、2009年11月の3日間(4, 18, 25日)の晴天時に行い、調査時間帯は13:00~14:30と15:00~16:30の2回実施した。なお、本研究では小学生を対象とし、文中での子どもとは小学生を指す。

3. 場所特性から見た子どもの活動展開

子どもの活動場所および内容に着目した観察調査の結果に基づいて、子どもの放課後活動の実態を把握する。

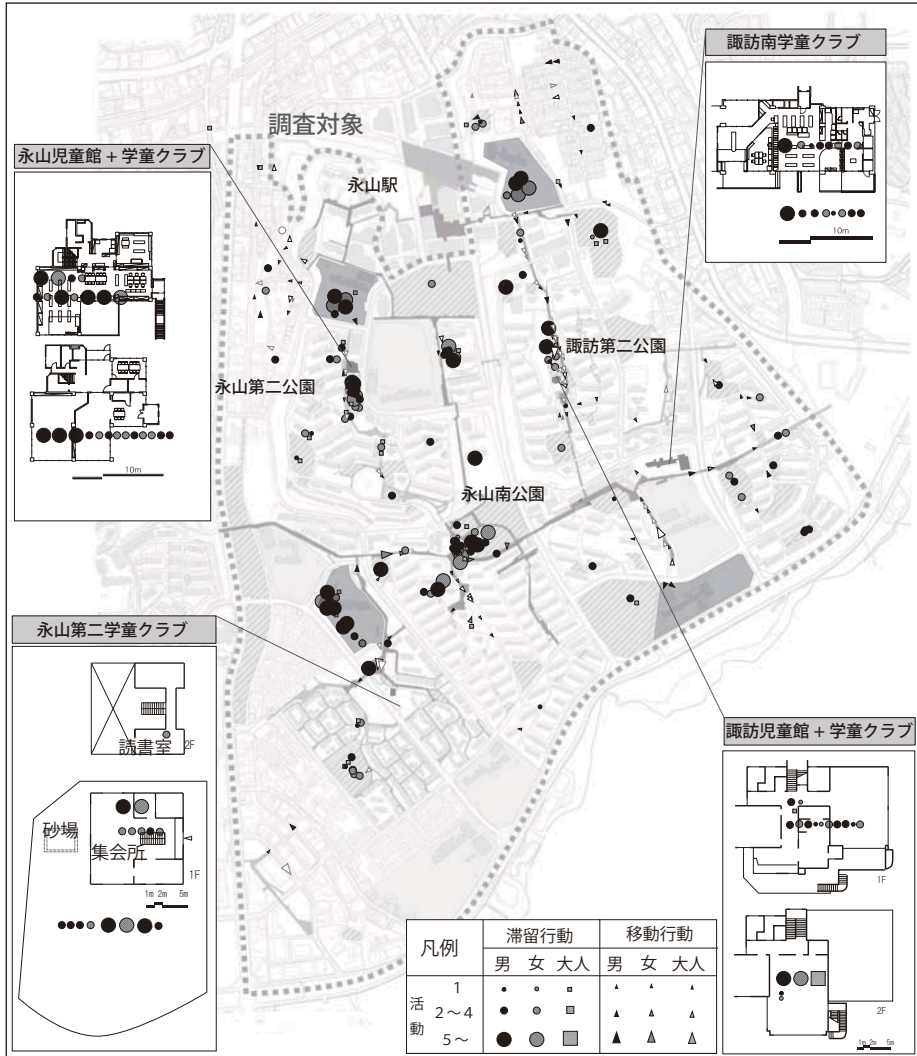


図. 3 諏訪永山地区における放課後活動の分布

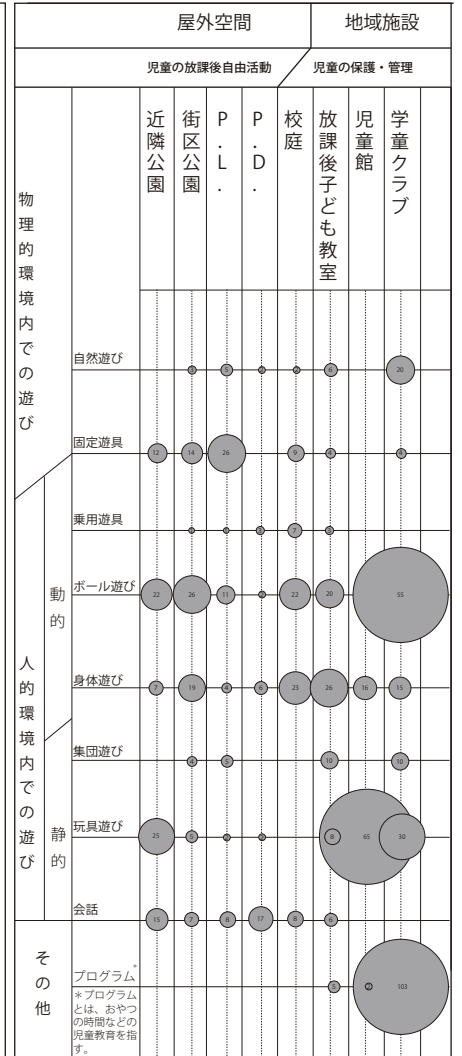


図. 4 子どもの主な活動場所と活動内容

3. 1. 子どもの地域分布

視測調査によって得られた子どもの屋内外の分布の実態を図. 3にまとめた。なお、図中の凡例は子どもの人数と性別を示し、人数ごとに3段階で表記した。

屋外の滞留行為に着目すると、いずれもP.D. 沿いの公園に集中していることが分かる。中でも永山南公園、永山第二公園、諏訪第二公園に多くの滞留行動が見られる。永山南公園はP.D. 主要動線上に位置し、近隣センター区域として子ども以外に高齢者や大人も集まる場所であり、様々な遊具と広いグラウンドが整備されている。永山第二公園と諏訪第二公園は、児童館と隣接した位置にあり、児童館、学童クラブに通う子どもとそれ以外の子どもが共に使用している。

地域施設では、子どもは小学校の校庭を利用しており、3小学校のうち2小学校に滞留行為が見られた。また、放課後子ども教室は、校庭を開放してボランティアの見守りによって子どもの屋外活動の拠点を出発する試みであるが、対象地区では瓜生小学校と諏訪小学校で実施しており、調査では瓜生小学校のみ捕捉出来た。放課後子ども教室で

の活動も地域の遊び場として子どもが多く滞留していることが分かった。

3. 2. 場所別に見た子どもの活動内容

放課後の主な活動場所とそこで行われる遊びの内容を図. 4に示す。活動場所を屋外と地域施設に分け、遊び内容により物理的環境内の遊びと人的環境内の遊びに分類し、さらに動的、静的に小分類した。P.D. を除く屋外空間では、固定遊具遊びやボール遊びのような動的な遊びが多く、近隣公園では動的な遊びの他に玩具遊びや会話などの静的な遊びが見られた。P.D. では会話による滞留行動が屋外空間の中で一番多いことが分かった。また、地域施設では屋外空間と同様に動的な遊びが多くみられたが、児童館では他の地域施設と比べ玩具遊びが多く、比較的静的な場面が多いことが分かった。

参考文献

- (1) 仙田満; あそび環境のデザイン, 鹿島出版 1987. 11
- (2) 住宅都市整備公団; 多摩ニュータウン事業概要 1996

* 大和ハウス工業株式会社

** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 助教

*** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 教授・工博

*Daiwa House Industry co.,Ltd

**Assistant. Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.

***Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.